群教セ	F09 － 01
	平16.224集

相手のことを思いながら 自分の気持ちを伝えられる児童の育成

── Ｓ．Ｓ．Ｔ．やブレーン・ストーミングを取り入れて ──

特別研修員　　半田　幸枝　（館林市立第六小学校）

《　研究の概要　》

本研究は、Ｓ．Ｓ．Ｔ．（ソーシャル・スキル・トレーニング）やブレーン・ストーミングを取り入れて、相手のことを思いながら自分の気持ちを伝えられるコミュニケーション能力を高めてきた。そして、身に付いた力を係活動という実践の場に取り入れた結果、自分の気持ちを表現したり、クラス全体のことを考えた活動を計画したりするようになり、交友関係でのトラブルや不登校の予防につながり、豊かな人間関係が育ってきた。
【キーワード：教育相談　Ｓ．Ｓ．Ｔ．　ブレーン・ストーミング　人間関係　係活動　】

Ⅰ　主題設定の理由

現在、４年生の本学級には不登校の児童も不登校傾向の児童もいない。しかし、アンケートをとったところ、学校に行きたくないと思ったことがある児童は６人と、全体の１７％もいた。その理由に、交友関係のトラブルをあげた児童が一番多かった。『学級の雰囲気を把握する質問紙』による調査でも、「悪口を言い合ったり、けんかしたりする」「友達をたたいたり、いたずらしたりする」が多く、学校に行きたくない原因はこのあたりにあるのではないかと思われる。

表1　学級の雰囲気質問紙（数字は人数）

Ａ：とてもそう思う　　Ｂ：わりとそう思う　　Ｃ：どちらかといえばそう思う
Ｄ：ほとんどそう思わない　　Ｅ：ぜんぜんそう思わない

	「学級の不和」に関する項目	A	B	C	D	E
24	いくつかのグループがあり、グループ同士は仲がよくない	0	2	4	7	21
25	友だち同士で、悪口を言い合ったり、けんかしたりすることがよくある	4	4	7	13	6
26	人の物がなくなったり、かくされたりする	1	3	3	11	16
27	友だちをたたいたり、いたずらしたりする人がいる	5	3	10	13	3
28	友だちがまちがうと笑ってしまう雰囲気がある	3	7	8	8	8
29	いじめがあると思う	0	5	7	13	9
30	仲間はずれにされている友だちがいる	0	3	8	14	9
31	グループ分けをする時などに、グループに入れない人がいる	0	3	3	11	17
32	休み時間などに、友だちにプロレス技などをかけている人がいる	0	1	3	6	24

学校に行きたくないと思ったことがある児童の中には、友達が自分の気持ちや状況などを考えずに思ったことを言うのでとてもいやだった、と訴えた児童が多かった。

また、グループ活動では、男女の分け隔てなく仲良く取り組むことができ、指示されたこともきちんと取り組もうとする児童が多いが、活動が進んでくると、自己中心的な言動がみえて

くる。これは、友達に何をしてほしいのかきちんと頼まなかったり、自分が考えていることは相手も考えていると思いこみ、友達のやりたいことも聞かずに勝手に決めてしまったりしたことに起因していることが多い。逆に、気持ちや考えを言えないまま友達の指示に従っている児童や、何をしてよいか分からず見ているだけの児童もいる。どちらの場合も、気持ちを伝えたり受けとめたりする技術や、人に依頼したり人の依頼を断ったりする関係性を構築する技術が未熟であると言えよう。

この未熟さは、社会の変化によるところが大きい。現代では、地域の結びつきが失われて異年齢の遊び集団が消失したり、教育力のある大家族の崩壊やプライベートを大事にする文化が出現したりしてきたことなどにより、家庭や地域が大きく変化してきた。ソーシャル・スキルを学ぶ機会がどんどん減ってきたのである。従って、児童は、大勢の友達や異年齢の児童のいる学校生活の中でソーシャル・スキルを学ぶ必要が生じてくる。指導者は、こうした児童の社会的背景を十分理解した上で、児童に適切な指導を行わなければならない。

そこで、Ｓ．Ｓ．Ｔ．で、他者の思考と感情の理解の仕方や自分の思考と感情の伝え方を学習し、トレーニングから徐々に実践へとスキルアップすることで、コミュニケーション能力を高めていく。さらに、ブレーン・ストーミングを通して様々な考え方やものの見方があることやそのよさについて理解し、併せて自己表現能力を高める。以上の取組が効果的に行われるように、指導者の援助・指導や賞賛の仕方を工夫していけば、相手のことを思いながら自分の気持ちを伝えられる児童が育ち、不登校の予防にもつながるのではないかと考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

Ｓ．Ｓ．Ｔ．やブレーン・ストーミングを通して身に付いた力を係活動で生かすことによって、相手のことを思いながら自分の気持ちを伝えられる豊かな人間関係をはぐくめることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

１　Ｓ．Ｓ．Ｔ．を行えば、今まで行ってきた友達とのかかわり方の違いに気づき、改善しようとする気持ちを高めることができるであろう。
２　ブレーン・ストーミングを行えば、様々な考え方があることに気づき、友達のよさにも気づくことができるであろう。
３　話合い活動や係活動において、Ｓ．Ｓ．Ｔ．やブレーン・ストーミングで身に付いた力を生かすと共に、教師の援助・指導や賞賛、友達の評価を取り入れれば、相手のことを思いながら自分の考えを伝えることができるであろう。

Ⅳ 計画の流れ

1 基本トレーニング

「話す・聴く」の基本的なＳ．Ｓ．Ｔ．（上手な聴き方、あたたかい言葉かけ、やさしい頼み方、上手な断り方）を行うことで、友達のことを考えた言葉かけを学ぶ。

また、自分の気持ちを発表することが苦手な児童にとっては、トレーニングとはいえ、自分の考えに自信が持てず何も言えない、経験がなく何を話していいか分からないなど、ロールプレイで進める学習に難しさを感じるのではないだろうか。そこで、ブレーン・ストーミング（連

想アイデアゲーム）で、様々な考えや表現方法があることに気づかせる。

ブレーン・ストーミングとは、グループのメンバーが気楽な雰囲気の中で、固定観念にとらわれず自由に思いつきやアイデアを出し合い、そこから想像と連想を働かせてさらに多くのアイデアを生み出す技法である。これには、「批判厳禁・自由奔放・質より量・便乗歓迎」という４つのルールがある。

2　話合いでの実践

話合いは、友達の意見を聞いたり、自分の考えや気持ちを話したりする活動である。また、提案された内容によっては、友達に協力を依頼しなければならないものや賛同しかねるものもあるだろう。そこで、今まで行ってきた係の仕事に工夫を加え、新たな活動を開始するための話合いを通して、基本トレーニングで気づいたことや身に付いた力を生かしていく。

3　係活動での実践

話合い以外の場でも、友達の助けを必要とする場面や頼みを断らなければならない状況が生じることもあろう。また、友達の協力に感謝したり友達の話に耳を傾けたりすることもあろう。そこで、基本トレーニングや話合いで身に付いた力を話合い以外の場（係活動）でも生かしていく。また、教師の援助・指導や賞賛、児童の評価を加えることで、友達を理解し豊かな人間関係を築くと共に、次の活動への意欲を高める。

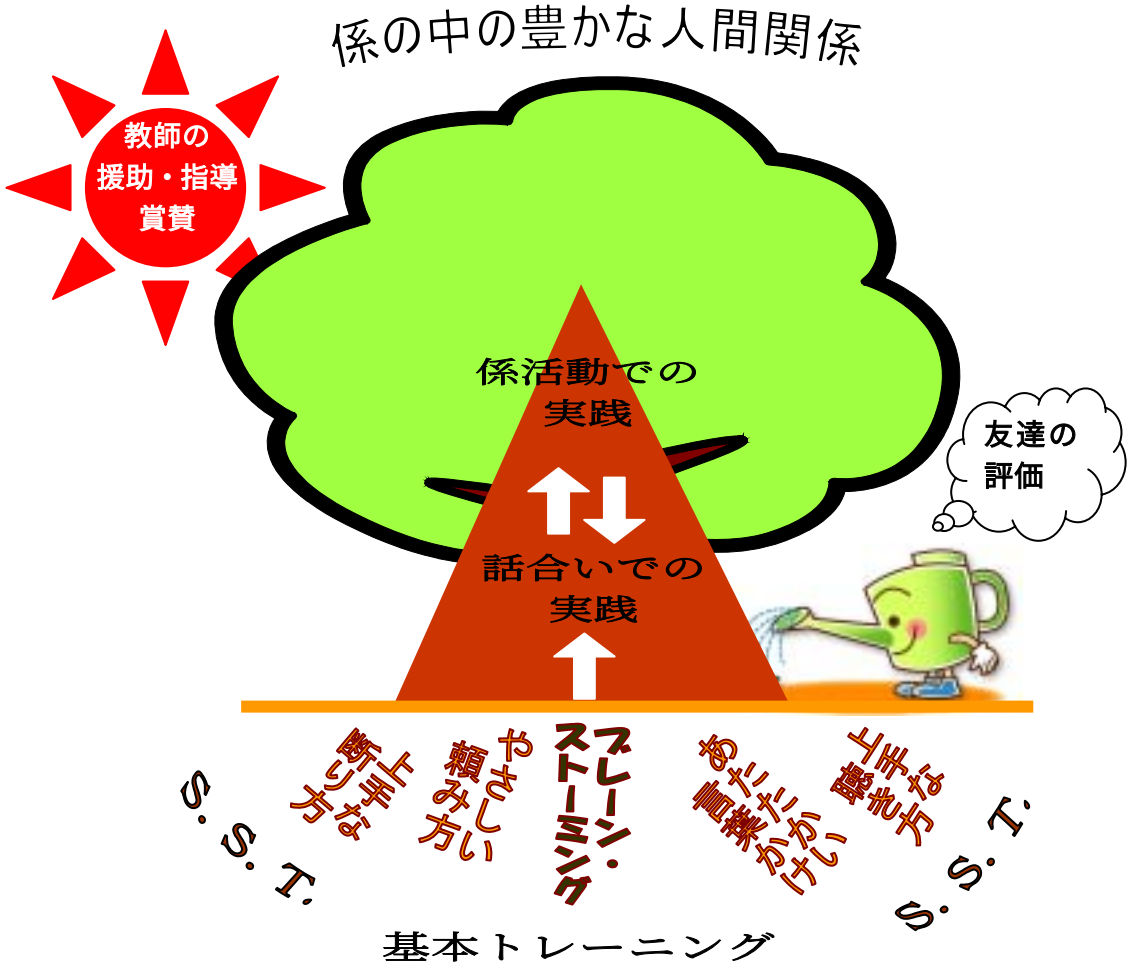


図１　全体構想図

Ⅴ　実践及び結果と考察

1　基本トレーニングの実践及び結果と考察

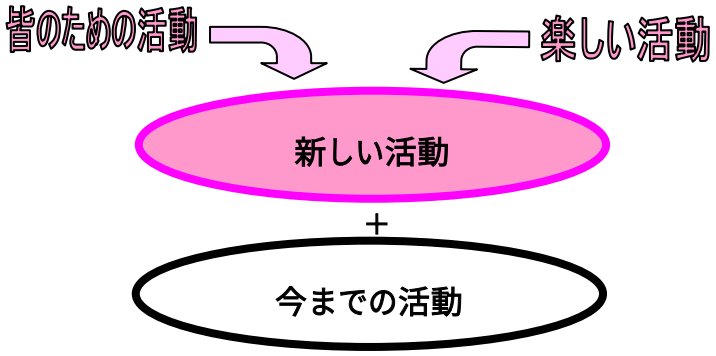
	内容（◇）及び援助・支援（◆）	児童の反応（☆）　及び　結果（○）と考察（◎）
ソーシャル・スキル・トレーニング	**上手な聴き方**（９／９） ◇「体を向ける」「話す人を見る」「あいづちをうつ」のルールで上手な聴き方を体験する。 ◆小さな声の児童には「繰り返し」を行い、話すことが苦手な児童には質問をする。	☆　質問をしてもらうと話しやすい。 ☆　聞こえない表情より「繰り返し」をしてもらう方がいい。 ☆　友達が話せるように聴くことは難しいことだと思った。 ○　授業でも小グループの話合いでは、耳を近づけてうなずきながら聴くなど、一生懸命聴こうとしている様子が見られるようになった。 ◎　「上手な聴き方」を体験したことで、児童は「話す」ことを通して上手な聴き方がどういうものかを理解することができ、改めて話の聴き方に関心を持つようになった。
	あたたかい言葉かけ(9／16) ◇友達のいいところをカードに書き、感情語を添えてその内容を伝える。 ◆内容が不適切な児童には文意を確認し、より適切な言葉を提示する。	☆　友達の発表を聴いて、言い方が分かった。 ☆　いろいろな言い方があることが分かった。 ○　帰りの会で「Ａ君が○○をしてくれました。ありがとう」という発表があり、感情語をつけた発表が増えた。 ◎　感情語を添えることで自分の気持ちがより正確に相手に伝わることや、あたたかい言葉かけが自分にとってもあたたかいものであることに気づいた結果であると考える。今までのかかわり方を改善しようという意識を高める上で有効であった。
	やさしい頼み方(9／22) ◇相手の気持ちや立場を考えながらお願いする方法を体験する。 ◆頼み方が分からない児童には、友達のロールプレイをよく見聞きするように助言する。	☆　友達の発表を聴いて、言い方が分かった。 ☆　いろいろな言い方があることが分かった。 ○　無理強いしている児童に「勉強したでしょう」と友達が声をかけると素直に謝るなど、気をつけようとする姿勢が見られるようになった。 ◎　今までの頼み方は自分勝手な頼み方であったことを、実践を通して気づいた結果であると考える。今後の交友関係改善に有効であると感じた。
	上手な断り方(9／28) ◇断られる相手の気持ちを考え、上手に断る方法をロールプレイで体験する。 ◆断り方がよく分からない児童には、友達のロールプレイをよく見聞きするよう助言する。	☆　言いづらかったけど、断られる方が笑っていたのでほっとした。 ☆　断るときも理由などを言う方がいいことが分かった。 ○　断り方が分かってよかったという感想が多く、生活や学習に生かそうという意識が高くなった。 ◎　断り方が分からずあいまいな返事や黙って約束を破るなどしていた児童が多かったので、友達のロールプレイを見たり、自分で体験したりした本時の学習は今後の交友関係に有効であった。
ブレーン・ストーミング	**連想アイデアゲーム**(9／7) ◇「ふわふわ言葉」をテーマに、思いついた言葉を書き留めていく。 ◆発表後、数だけでなく発想の豊かさなどについても賞賛する。	☆　たくさん言えて楽しかった。 ☆　いろんな考え方があると思った。 ○　初めは単語の数にこだわっていたが、発表の豊かさや取組のよさなども賞賛すると、単語数の少ない班の児童もうれしそうな表情を見せた。次回は、他の班の考え方も取り入れようというつぶやきも聞こえた。 ◎　全員が発表し多様な意見が出たのは、発表が苦手な児童にとって４つのルールが、発表に対する緊張感を和らげたのではないかと考える。ふだんは自分の考えをあまり出さない友達の意見もたくさん聴くことができ、友達のよさを知る上でも有効であった。

2　話合いでの実践（学級活動）

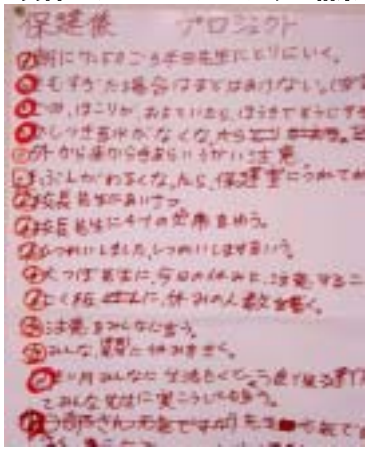
(1)　実践と結果

今まで行ってきた係の仕事の他に「係としてみんなのために何ができるか」をブレーン・ストーミングで話し合った。

なお、話合いの前に、発表の苦手な児童のために考える時間をとった。



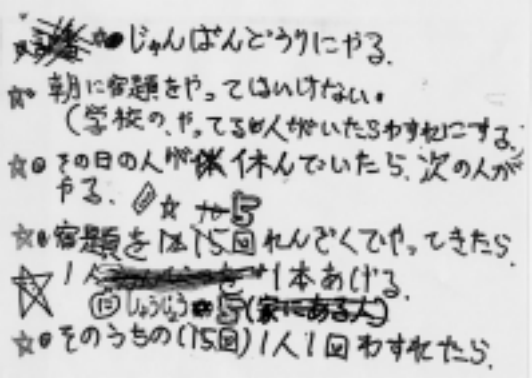
資料1　ブレーン・ストーミングの結果



普段はあまり発表しない児童からもいろいろな意見が出され、どの係も新しい活動が提案された（資料１）。

次に、書き出した意見をグループ分けし、具体的な取り組み方について話し合った。

【学習係の取組】

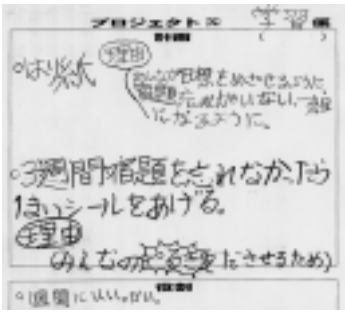


A「鉛筆たくさん持ってるから、あげようよ」
B「いいよ。私も持ってるから」
C「うちにはないよ。他のものにしない？」
D「賞状は？」
E「いいけど、作るの苦手だし、たくさんいるよ。大変じゃない？」
F「シールは？」

今までは提案された意見に対し「面倒だ」というような否定的な発言もあった。しかし、『上手な断り方』のトレーニングが生かされ、賛成できない理由や代案を加えての発言が聞かれるようになった。また、『あたたかい言葉かけ』のトレーニングも生かされ、提案者の気持ちを考え穏やかに話す児童も現れた。

どの係についても、楽しそうに話合いが進み、皆のための活動や楽しみながら学べる企画がいくつも提案された。

資料2　新しい活動計画



【話合いの結果】

体　育　係：皆が協力して取り組めるようにキックベースボールをする。

整　頓　係：10 回連続できれいに整頓されていたら賞状をわたす。

保　健　係：外で遊ぶように声をかけたり、ほこりがあったら掃除したりする。

振り返りの場面では、自己評価と相互評価を行った。相互評価については、ワークシートに書いた友達の評価を交換し合った。

意見があまり言えず自己評価の低かったAは、「まとまらなかったところを一生懸命考えてくれて助かった」という友達の評価を得て、「あまり意見を言えた場面ではなかったが、自分の意見がヒントになったのかな、と思いうれしかった。次はもっと発表する」と話し、評価した友達に対するあたたかな思いや次への意欲を高めていた。

(2)　考察

今までは、友達の提案を否定するような発言もあったが、S．S．T．を行ったことで、聴き方や話し方が改善され、あたたかい雰囲気で話合いを行うことができた。また、今までは一部の児童しか発言しないことがあったが、ブレーン・ストーミングを行ったことで意見が発表しやすくなり、話合いが活発になった。

さらに、自己評価だけでは、できなかったことへの反省や一つの偏った見方しかできないが、友達による『あたたかい言葉かけ』の評価を得ることで、次の活動に前向きに取り組もうとする意欲につながった。

3　係活動での実践

(1)　実践と結果

話合い以外の場でも身に付いた力を生かせるよう、「2　話合いでの実践」で計画したことを実行する場面を設けた。

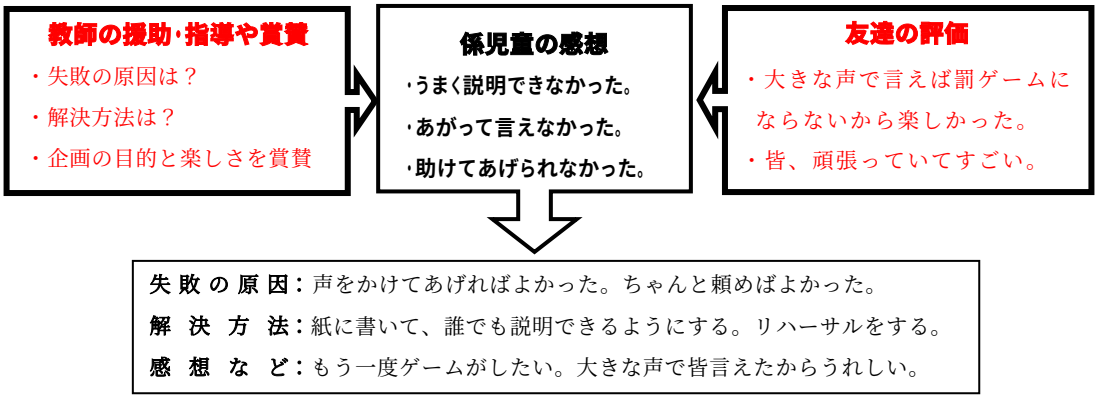
各係によって活動はさまざまであるため、イベント的な活動を計画した係については、活動後に振り返りの時間を設け、それ以外の係については必要に応じて振り返りの時間をとった。また、全体では月末の学活の時間に１ヶ月の活動を振り返った。

【学級代表の実践・１回目】

目　　的：ルールを工夫してフルーツバスケットをすることで、授業中も大きな声で発表できるようにする。

流　　れ：目的やルールの説明は明確に伝わらず、質問を受けて何度か言い直した。
ゲームは無事終了した。

振り返り：

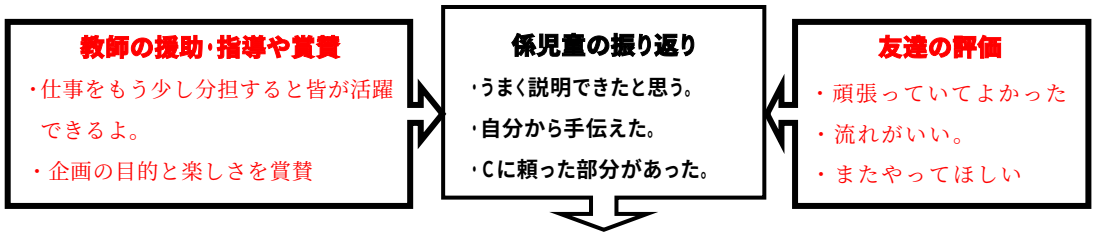


【学級代表の実践・２回目】

計　　画：皆でもっと協力できるようにグループ対抗で「この人誰？」ゲームをする。

流　　れ：目的やルール説明もすぐに終わり、ゲームも無事終了した。

振り返り：



C：自分でしゃべってどんどん進めていて、皆のことを考えていなかった。
D：１回目よりは皆に協力できたと思う。
E：「Cばかりで大変だから、その仕事わたしがやってもいい？」と声をかければよかった。

(2)　考察

トレーニングや話合い活動を通して友達のことを考えるようになってきたことで、どの児童も皆のために自分も頑張らなければならないという気持ちが強くなってきた。また、「上手な聴き方」や「やさしい頼み方」が足りなかったことも実践を通して気づくことができた。

新たな活動を計画したり、次回への意欲へとつながったりしたのは、振り返りの中に教師の援助・指導や友達のあたたかな評価が加わったことによるものと考える。また、友達の評価を受けたことで、評価した児童に対する気持ちもあたたかいものになり、豊かな人間関係へとつながった。

資料3　追加された活動

保健係

☆空気の入れかえをする。
☆ゴミが落ちていたらそうじする
☆加湿器の水を入れる。
☆毎月の保健目標を作る
☆健康観察のときは名前を呼ぶ。
☆欠席者に手紙を書く。
☆欠席の少ない人に賞状を出す
☆残さず食べた人に賞状を出す。

Ⅵ　研究のまとめと今後の課題

Ｓ．Ｓ．Ｔ．やブレーン・ストーミングを取り入れたことで、相手のことを考えるようになり、自己中心的な言動が減ってきた。また、理由や感情語を加えることで表現能力が高まり、回を重ねるごとに話合いや係活動が明るく活発なものになってきた。さらに、基本トレーニング、話合い活動、係活動と３段階のプログラムを組んだことが、新たな気づきにつながり、相手のことも思い、自分の気持ちも伝えられる児童の育成につながった。

しかし、放課後や休み時間など教師の目の届きにくいところでは、自己中心的な言動やあいまいな返事などが見られる。今後も日常生活の中から児童の実態に即した活動を取り上げ、相手のことを思いながら自分の気持ちを伝えられる児童の育成を目指した活動に継続して取り組んで生きたい。

〈参考文献〉
・國分　康孝　監修　『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる　小学校』図書文化(2004)
・諸富　祥彦　編著　『カウンセリングテクニックを生かした新しい生徒指導のコツ』学研(2001)